

「二」次の文章を読んで、後の問に答えよ。

公共的空間は開かれているにもかかわらず、そこにはつねに排除と周辺化の力もはたらいている。何が公共性にアクセスする途^{みち}を封じ、それを非対称的なものになっているかは、できるだけ冷静に認識しておく必要がある。

まず、公共性からのフォーマルな排除について見よう。政治的な意思形成・決定過程からの制度上の排除は、いまだ解決されていない問題である。近代の市民社会は、政治的公共性への入場資格を「教養と財産」をもつ男性に限定することによって成立したこと、社会契約の論理が女性を公共性から排除する「性的契約」（キャロル・ペイトマン）の論理をとまっていたこと、そしてそれが階級や性別のみならず人種主義や異性愛主義^{ヘテロセクシズム}などによる排除をももたらしてきたことは、あらためて指摘するまでもないだろう。政治的公共性にアクセスする途を特定の人びとに対して塞いできた障壁は、排除されたマインオリティ自身による運動——女性解放運動や公民権運動など——もあ^アずかつて、ほぼこの一世紀の間にそのほとんどが取り除かれてきた。おそらく最後の制約として残っているのは、国籍による排除である。

政治的権利（選挙権・被選挙権）はたしかに閉じたメンバーシップを要求する。問題は、ある歴史的条件的もとで、そのメンバーシップを国籍によって定義するのが妥当かどうかということである。国籍の取得が純粹に形式的な要件（居住年数等）によって容易になされるのであれば問題はない。しかし、日本国籍は「血統」（「出生地」ではなく）によって定義されるものであり、しかも過去の植民地主義の歴史——在日・韓国朝鮮人の国籍を戦後（一九五二年）、一方的に剥奪した歴史を含め——がそこに刻まれている。国籍取得にいちじるしい困難がある場合にとりうる選択肢は、政治的権利を享受する資格（citizenship）を国籍（nationality）から切り離すことである。デモクラシーの原理は端的^イに言えば誰からもその発言権（voice）を奪わないことにある。この点で、日本の政体は、一方でさまざまな義務を求めながら、他方では政治的な発言権を否認するという明らかな「専制」の要素をなおもとどめているのである（司法判断は、地方自治体における選挙権については合憲的とするにいたった。国政レベルにおける選挙権・被選挙権が承認されるためには憲法それ自体の改正もしくは国籍法の改正が必要になる）。

つぎに少し立ち入って検討したいのは、公共性からのインフォーマルな排除の問題である。とくに注目したいのは、「言説の資源」(discursive resources)という眼に見えない資源が公共性へのアクセスをいかに非対称的なものになっているかという点である。所得や資産などのマテリアルな資源が重要でないわけではない。たとえば、人前にでるのに恥ずかしい思いをしないですむもの(衣服や靴)を身につけることはつとにアダム・スミスが強調した人間にとっての基本的必要である。そうした経済的格差がまた、教育を受ける機会の格差、情報の収集・分析・発信の能力の格差などに如実に反映されることはあらためていうまでもない(マイケル・ウォルツァーが述べるように、貨幣は目下のところ他のほとんどの財にコンバート可能な財なのであるから)。これに加えて、公共的空間へのアクセスを大きく左右するものとして、自由時間という資源がある。生活の必要から解放され、自由時間を得ることが「政治的な生」を生きるための条件であることは古代ギリシアまでサカノボ^エる認識だが、いまや「時間の貧困」(time-poverty)は物質的貧困に脅かされない人びとにとっても切実な問題となっている。たとえば、仕事と家事の「二重負担」は、公共的空間にアピールすべき問題を抱えている人びとが、自由時間という資源の欠如ゆえに十分にアクセスできずにいるという悪ジュンカンの^オ典型を示している。

「言説の資源」は、公共性への実質的なアクセスを根本から左右する。というのも、公共性におけるコミュニケーションは、ほかでもなく言葉というメディアを用いておこなわれるからである。そこでは、「言説の資源」に恵まれた者たちが「ヘゲモニー」(文化的・政治的に他者を指導する力)を握る。この資源は量的なタカ^カではなく質的な優劣によって測られる。たとえば、かりに同じ内容が語られるとしても、その発話が明瞭であるかどうか、要を得ているかどうかの違いは、コミュニケーションの行方に大きな影響を及ぼす。文化の支配的なコードをすでにわがものとしているかどうか、「言説の資源」の優劣を規定するわけである。そうした文化的コードは言説にとつて外在的なものではなく、まさに言説の実践を通じて構成されるものであり、公共性は、このコードからは自由ではありえない(かりに貨幣や権力から自由でありえたとしても)。

言説の資源は、第一に、人びとがどのような語彙をもっているかにかかわる。自らの問題関心を説明し、他者を説得する理由を挙げるためには、当面のコンテキストにふさわしい(とされている)言葉がある程度自由に使用できることが必要である。もし、問題を論じるための適切な語彙に乏しいとすれば、そうした言説は周辺に追いやられることになる。言説の

資源の格差は、日常知の間の非対称性だけでなく、専門知と日常知との非対称性という形をとることもある。たとえば、金融・医療・先端科学技術などをめぐる争点について、公共的空間の論争を実質的にバイパスする仕方^キで意思決定がおこなわれる傾向がケン^クチョになってきている。そうした言説の資源の格差にもとづく支配（technocracy）を批判的に制御するためには、専門家に説明責任を課し、日常言語への翻訳を求めるだけではなく、専門知をもって専門知を批判しうる対抗的な言説をその外部にもつことも必要である。

第二に、見過ごされやすい問題だが、言葉をどのように語ることができるかという言説のトーン（語り方・書き方）は、重要な資源の一つである。「合理的」とされている語り方は、感情の抑制、明瞭な発話、話の簡潔さなどを暗黙^クのうちに求めている。逆に、「黄色い」声、「うざったい」語り口などが、その内容が問われる以前に、公共の言説の空間から遠ざけられることはけっして稀^{まれ}ではない。とりわけ身体性が前面にでる語り方が排除されるという傾向は、現在の文化的コードがどのように編成されているかを暗示してもいる。

第三に、本書の関心にとって最も重要なのは、公私の区別をわきまえ、公共の場にふさわしいテーマを語らなければならぬという暗黙の規範的要求の問題である。言説の資源は、その意味で、場にふさわしい主題を選択できるかどうかという能力にもかかわっている。「個人的なもの」を差し控えることのできない言説は排除の対象となる。

この問題が重要なのは、「公共的なもの」は、何を「個人的なもの」「私的なもの」として定義するかによって反照的に定義^コされるからである。公共的領域と私的領域の境界は固定したものではなく、何をもって「私的」とするかという言説によって書き換えられる。近代の「公共性」の定義にとって決定的な意味をもったのは、宗教や信仰をめぐる事柄を「私事化する」（privatize）^{ハコ}によって、それらを公共的な争点から除き去ることであった。身体とりわけ性的な事柄も、一方で「生命―権力」の標的とされつつも、不可視のパーソナルな次元に位置づけられてきた。近代の「公共性」は、多くのテーマを「私的なもの」とすることによって自らを定義してきたのである。このことは、逆にいえば、公私を分ける境界線は言説に依存する流動的なものであり、言説以前のもの、政治以前のものではないということの意味している。

「個人的なことは政治的である」（The personal is political）という一時期のフェミニストの標語は、従来の公私の境界

設定を問題化しようとする意図を端的に表している。それは、性別役割分業を正当化する言説によって公共性から排除されてきた家事労働やケア・ワークなどを政治的な争点としてとらえ返そうとする対抗的な言説の好例である。ドメスティック・ヴァイオレンスやセクシュアル・ハラスメントなどに見られるように、この間、私的な「不運」(misfortune)、個人的に解決すべき(堪え忍ぶべき)問題として語られてきた多くの事柄が公共的な「不正義」(injustice)としてとらえ返されるようになってきた。また、家族の手によってなされるべき「私事」として語られてきた介護についても、まがりなりにも公的な制度がもうけられるようになった。公私の境界の変化をもたらすのは、境界を超えて語る言説の実践の累積的な効果である。

「私的なもの」として語られてきた事柄を「公共的なもの」として再定義しようとする場合、一人一人による散発的な異論の提起には限界のあることが多い。自己主張を自ら抑制し、既存の権力関係を攪乱(かくらん)しないかぎりでかろうじて生きる場所を与えられるということが現にあるからである。文化の支配的なコードに対して挑戦することは、やはりある程度の勇気と覚悟を要求する。「言説の資源」という点で劣位にあるマイノリティにとっては、そうした限界に挑むうえで、自分たち自身の言説の空間を創出することが有効である。公共的空間において一般に私事と見なされている事柄は、この空間では共通の関心事として取り上げられる。アテンションの配分(エコノミー)配置は再編され、これまでマジョリティによって無視され、黙殺されてきた事柄に焦点があてられる。

こうした言説の空間は、ナンシー・フレイザーのように「対抗的な公共圏」(counter publics)とよばれてもいいし、あるいは「オルタナティブな公共圏」(alternative publics)とよばれてもいい。いずれにしても、この公共圏では、支配的な公共圏とは相対的に異なった「言説の資源」が形成される。ここでは、自分たちの「ニーズ」に外から与えられた解釈を問題化し、自分たちに貼り付けられた「アイデンティティ」なるものを疑問に付し、「異常である」「劣っている」「遅れている」といった仕方でおとし貶められてきた自分たちの生のあり方を肯定的なものとしてとらえ返し……という再解釈・再定義の実践が試みられるだろう。そこではまた、優勢な公共圏とは異なった言説のモード——たとえば一人称の物語り——や多彩なレトリックが重んじられるかもしれず、逆に、経験の形跡に裏打ちされない言葉やあまりにも理路整然とした物言い

は信頼をかちえないかもしれない。

この公共圏では、自分が語る意見に耳が傾けられるという経験、少なくとも自分の存在が無視されないという経験が可能となる。対抗的な公共圏の多くは、それを形成する人びとの具体的な生／生命に配慮するという「親密圏」としての側面もそなえている。自らの言葉が他者によって受けとめられ、応答されるという経験は、誰にとつても生きていくための最も基本的な経験である。この経験によつて回復される自尊あるいは名誉の感情は、他者からの蔑視や否認の眼差し、あるいは一方向的な保護の視線を跳ね返すことを可能にする。自己主張をおこない、異論を提起するためには、自らがあつた場所では肯定されているという感情がおそらく不可欠である。

対抗的な公共圏との関連で言及したいのは、言説の公共圏を形成しがたい条件のもとにある人びとについてである。「孤独」^ス (loneliness) あるのは「見棄てられた境遇」 (Verlassenheit) の問題である。アーレントが見るように、この境遇の問題は、人びとが「他者に見られ、他者に聞かれるという経験」を失うということにある。それは、他者の不在という堪えがたい状況に堪えることを人びとに強いる（念頭にあるのは主に都市部の高齢者であるが、育児や介護に長期間縛り付けられている人びとも含まれる）。マイノリティとして自らを理解し、自らの公共圏をつくりだしていくための最低限の資源、つまり他者の存在がこの境遇には欠けている。孤独な境遇を生きざるをえない人びとは、その意味で、公共的空間から最も隔たったところに位置している（誤解のないように付言すれば、「孤独」 [loneliness] と「一人びと」 [solitude] とは異なる。後者は、他者との関係から自分だけの空間へと自ら退去することであり、思考という内的対話を始めるための条件でもある）。

公共性に現にどのような排除があるかを振り返るとき、おそらく最も重要でかつ最も困難な問題は、ある人びとを孤独な境遇に追いやっていて、それとして意識されない「分断」 (segregation) の問題だろう。困難だというのは、そうした境遇からはほとんどメッセージが届かないがゆえに、私たちは、問題を無視する以前に、問題があるということそれ自体を忘れることができるからである。誰もが陥りやすい境遇であるにもかかわらず、それを見えないもの、聞こえないものにしていくのが、私たちの現在のアテンションのあり様である。重要だというのは、「見棄てられた境遇」は、現在の公共性がどの

ような価値を中心に行っているかを逆に鮮明に照らしだしているからである。つまりそれは「余計者」でもあり同時に「口の死せる（mundtot）者」でもある人びとを膨大に生みだす価値の編成のされ方を浮かび上がらせている。

（齋藤純一『公共性』より）

問一 「あずかつて」^アとあるが、これと同じ意味で「あずかる」が使われているものを次の中から一つ選べ。 1

- 1 招きにあずかる 2 荷物をあずかる 3 留守をあずかる
- 4 喧嘩をあずかる 5 お褒めにあずかる 6 条約起草にあずかる

問二 「端的」^イとあるが、「端」を用いた語句として、**適当でないもの**を次の中から一つ選べ。 2

- 1 中途半端 2 木端微塵^{みじん} 3 容姿端麗
- 4 異端審問 5 準備万端 6 端刀直入

問三 「バイパスする」^キの言い換えとして、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。 3

- 1 加速する 2 迂回^{うかい}する 3 通過する
- 4 接続する 5 軽視する 6 尊重する

問四 「暗黙」^ケの対義語を、次の中から一つ選べ。 4

- 1 自明 2 克明 3 明示
- 4 明哲 5 明朗 6 明察

問五 「理路整然」^シの対義語を、次の中から一つ選べ。 5

- 1 公明正大 2 支離滅裂 3 百花繚乱^{りやうらん}
- 4 自画自賛 5 厚顔無恥 6 温故知新

問六

「サカノボ^エル」「ジ^オンカン」「タ^カカ」「ケ^クンチヨ」の漢字と、同じ漢字を含むものを次の中から一つ選べ。

6 7 9

エ 1 暫定的なソチ 2 ソアクな商品 3 ソエンになる

4 ソコウが悪い 5 溪流をソコウする 6 広告のソキユウ効果

オ 1 親善事業のイツカン 2 カンキョウを催す 3 自然にカンゲンする

4 カンゲン楽をたのしむ 5 カンセイをあげる 6 カンセイな住宅街

カ 1 カサンする 2 カモツ列車 3 カシツによる事故

4 カダイを提出する 5 カキユウ的速やかに 6 カブンにして知らない

ク 1 ケンシを抜く 2 ケンザイ化する 3 ケンメイな努力

4 ケンメイな判断 5 事実をケンシヨウする 6 ニュウジョウケンを買う

問七

「公共性からのインフ^ウォーマルな排除」が生じうる要因として**適当でないもの**を、次の中から一つ選べ。

10

1 他者の不在 2 時間の貧困 3 一方向的な保護の視線

4 文化の支配的なコード 5 境界を超えて語る言説の実践 6 私たちの現在のアテンションのあり様

問八

「反照的に定義^コされる」とあるが、このことの説明として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

11

1 公共的なものは、理性と身体という区別を用いて定義されるということ。

2 公共的なものは、政治に関わる事柄として直接的に定義されるということ。

問九

- 3 私的なものは、支配的ではない文化的コードを用いて定義されるということ。
- 4 私的なものは、公共的なものから排除されることによって定義されるということ。
- 5 私的なものは、個人の価値観に関わるものとして直接的に定義されるということ。
- 6 公共的なものは、私的とみなされる事柄ではないものとして定義されるということ。

「私的なもの」として語られてきた事柄^サとあるが、その例として最も適当と思われるものを、次の中から一つ選べ。 12

- | | |
|---------------|----------------|
| 1 一人称の語り | 2 人種主義や異性愛主義 |
| 4 自尊あるいは名誉の感情 | 5 家事労働やケア・ワーク |
| | 6 女性解放運動や公民権運動 |
| | 3 在日・韓国朝鮮人の国籍 |

問十

「孤独^ス」とあるが、それはどのような境遇のことか。最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

13

- 1 他者からの支援を受けられず、自ら自立しなければならない境遇。
- 2 現在の公共性を編成するさまざまな価値の一つとなっている境遇。
- 3 自らの言葉が他者によって受け止められ、応答されることのない境遇。
- 4 対抗的な公共圏を形成して支配的な文化的コードに挑戦している境遇。
- 5 ものごとについて考えるために自分だけの空間へ引き下がっている境遇。
- 6 マイノリティとして、マジョリティに対して自身の問題をアピールしている境遇。

問十一

本文の内容に合致するものを、次の中から二つ選べ。

14

の欄に二カ所マークすること

14

- 1 「言説の資源」に恵まれているか否かは、感情表現の豊かさに比例する。
- 2 「言説の資源」に恵まれているか否かは、経済的格差とは無縁のものである。
- 3 「言説の資源」に恵まれているか否かは、公共圏への発言力を潜在的に規定する。
- 4 「私的なもの」を「公共的なもの」へ再定義するために、「孤独」がもつ有用性を認識する必要がある。
- 5 「私的なもの」を「公共的なもの」へ再定義するために、プライベートな経験を論理的に語ることが必要である。
- 6 「私的なもの」を「公共的なもの」へ再定義するために、支配的な公共圏で黙殺されてきた価値に光をあてる必要がある。

〔二〕次の文章を読んで、後の問に答えよ。

もし初夏の田舎道を歩くなら、どんなものが目に入ってくるだろう。たとえばそれは、麦畑に色彩的なアクセントを与えるヒナゲシの赤さだったり、畜舎から牧草地までを移動する家畜の親子の姿だったりする。農地に設置された回転式自動散水機が、作物にも脇を通る人にも分け隔てなく水を撒くさまも目に留まるかもしれない。秋になればそのあたりは、堆肥の臭いがたちこめ、遠く離れた所でトラクターがゆっくりと動いていくだろう。田舎道だけでなく、街路や山道を散歩するときもまた、その時々に応じた色どりや音、におい、味などを私たちは感じとっている。

徒歩は、この二世紀の間に中心的な **A** から **B** へとその位置づけが変わった。今日それは、飛行機や電車など「遠いものをすぐに近づける技術」のおかげで、やむをえない移動手段では必ずしもなくなり、道中の景色を楽しむ気ままな旅を可能にしてくれる。徒歩は、しかし同時に、周囲の気候や地理などさまざまな物質的状况に左右される動きでもあるのだ。

徒歩は人類一般に共通する行為でありながら、歩行者 *pedestrian* が英語で「ありきたり」を意味するように、ただ右足と左足を交互に出す単純な動きであるせいか、近年まで研究テーマとして光が当てられることは少なかった。もちろんかつて、マルセル・モースやピエール・ブルデューは、徒歩が社会にいかなる役割を果たしているか、そしてマルク・オジェやミシェル・ド・セルトーは徒歩が場所にどのような可能性をもたらすかなど、議論のモチーフのひとつとして取りあげたことはあった。しかしそこで問題化されたのは、価値や意義を擁する行為としての徒歩であった。

しかし近年、価値や意義を擁する徒歩よりもむしろ、ブラブラという響きが似あう散策的な動きとしての徒歩が注目されつつある。こうした歩く経験を求めているの徒歩実践への関心は、思想的には、産業革命以来、近代社会を生きる人びとが経験してきたロマン主義的なものへの志向性がその背景にあるとされる。ロマン主義的というと、夢想やナイーブさを想起させるが、徒歩研究では、必然性に回収されない経験を主題化する点に特徴がある。余裕のない徒歩では気づけなかったものが、散策的な徒歩であれば、見えてくるものや感じられるものが出てくるというわけである。

C 近年の徒歩に関する民族誌的研究では、物質的環境——本章では厳密な意味ではなく具体的な、あるいは触知可能などという意味で用いている——に対する全身体的な関わりのなかから立ち現れる景観についての研究が盛んである。D、

歩く身体それ自体（身体性）ではなく、歩く身体から把握される世界（景観）について具体的に考察する研究が展開しつつあるといえる。E ジョー・リー・フェルグンストとティム・インゴルドは、アバディーン郊外をフィールドに、通勤手

段としての徒歩と散策的な徒歩との差異について、建物や路面の形状などに注目しながら考察している。フィールドワークにもとづく研究という特性からか、徒歩に関する民族誌的研究の多くは、景観について、文字通り「地に足をつけて」具体的に考察することを目指す点に特徴がある。F、このような流れをくむ徒歩研究に関する研究発表や論文ではしばしば、

近年増加する民族誌的景観研究における抽象的な議論から距離を取ろうとする立場表明が掲げられることがある。その際に、インゴルドによる景観論が引用されることがあるので、ここでも紹介しておこう。

狩猟採集民であろうと、農耕民であろうと、人は歴史を通じて土地から生きる糧を得てきたのであり、空間からではない。農民は地中に農作物を植えるのであり、空間にはない。家畜類は牧草地を見やるのであり、空間を見ているのではない。旅人は地山をたどってゆくのであり、空間をたどることはしない。そして人が歩き、立ち止まるのは地上であり、空中ではない。絵描きは景観のなかにイーゼルを立てるのであり、空間の中にはない。

インゴルドは、観察される諸現象の一部に自らが組み込まれていることを忘れて、思弁的に人工物や自然物などを分類する景観論を批判している。多くの徒歩研究もまた、物質的に存在し、なおかつ人びとが活動のなかで感じ取ることができる、具体的な景観をとらえる試みをしている。歩いて経験される世界としての景観は、文化的資源、ジェンダー、宗教、行政区画などにカテゴリー分けされているわけではなく、限られた視野の中にそういったものが雑多に入り混じり、また、動きと共に揺らぐ不安定なものとしてある。近代的な思考様式に則ってカテゴリー分けする思弁的な景観論に対して「地に足をつけた」景観理解を促す徒歩研究と同様、本章もまた、場所との関わりのなかで立ち上る景観を具体的に徹してとらえていこう

と思う。

ここまで、近年の徒歩研究における問題関心が、GよりもむしろHに向いていること、また、Iを考察するにあたり、Jの相互浸透的な関係を具体的な次元から把握する視座が隆盛していることを述べてきた。次に、歩く身体が認識する景観をとらえるうえで重要となる、もう一つのポイントである「動き」に着目してみたい。徒歩の動きというのは、特定のエリア内に留まるわけでも、高速で移動するわけでもない。では、こうした固定的でも流動的でもない徒歩の動きを通じて認識される景観とは、どのような特徴を有しているのだろうか。

一般的に、住むことと移動することは、対照的に語られがちである。

K

暮らし方や情感に注意

をはらうこの立場は、大量生産や商業主義と連動した移動の過剰が、軽薄で居場所のない感覚をつくり出すと考える。

これと対照的な見方が、場所を地球上の座標軸に固定されたものとし、そこを人などが越境するという場所観である。トランスナショナルな文化の流動性を把握する方法としてアルジュン・アパデュライが考案した多層的なフローを想像的に俯瞰する視点はこの場所観に立脚している。

しかし徒歩によって経験される景観をとらえようとするとき、このうちどちらかの観点を採用しようとするとう無理が生じてきてしまう。なぜなら、場所を「移動しない人びと」の立場からアプローチする前者の議論は、あらゆる移動を否定的にしか見られなくなってしまうし、かたや、グローバル化やモビリティを念頭に置いた移動研究における場所のとらえ方は、地球規模の移動と流動性とを、やや性急に関連づけてしまうという問題があるからだ。

少し説明を加える必要があるだろう。これら対照的なアプローチは、別の角度からとらえ返すと、ある種の類似性が明らかになってくる。鍵となるのが、景観というものを地平線の内部に位置づけられる世界としてとらえ、それが動きと共にその内容が変化するものととらえる視点である。

ここでのいう地平線とは、比喻でも象徴でもなく字義通りの、（誰もが目にしたことがあるけれども誰も触れたことがない）地面と空の境界をなす線である。私たちが見ることができると世界はつねに地平線の内部に限定されている。しかし地平線の

位置は歩き進むにしたがつてずれていき、その内部に含まれる諸物も変化していく。言葉で説明しようとするとな難解だが、坂道や野原などで、地平線を目にした際に、じっさい誰もが経験的に知るところである。地平線に囲まれた、私たちが把握できる有限な領域を景観ととらえなおしたうえで、今度は、先にふれた「グローバルに高速移動する人びとによる景観」と「移動しない人びとによる景観」を、それぞれやや戯画的にとらえなおしてみよう。

グローバルに移動する人びとが経験するのは、空調の効いた機内、会員制の施設など、カプセル化された場所が多く、ここでは、関わる人びとや事物にほとんど変化はない。移住者の数的規模にもよるが、国を越えて移住しても、日々訪れる店や祠^{ほこら}、「仲間」として関わる人びとが移住前と同質であることが少なくない。そのように考えると、グローバルな移動を繰り返す人びとの世界はむしろ固定的であるともいえる。

対して、特定の地理的領域から大きく動かない人びとにとっての景観はどうだろう。彼らは、季節変化や日照量、温度や降雨、虫の動きなど多種多様なものが劇的に変化していく世界の内部に留まり続ける意味で、アパデュライがイメージするような多層的なフローを、まったく逆方向から経験している。つまり、視点を変えれば、地球規模の頻繁な移動にはカプセル化された定着性が内包されており、特定の地理的領域に留まることには、土地への定着性のなかに激しい流動性が内包されていることがわかる。

場所を「移動しない人びと」を対象とする研究と「移動する人びと」を対象とする研究のアプローチにおける溝は、このように、地平線の内部で経験される世界という角度からとらえなおすと、相対する景観のとらえ方のあいだにある興味深い類似性が浮き彫りになる。他方、徒歩は、激しい外的な変化にさらされるほど一つの場所に留まるわけでも、人・モノとの関係を定着させるほど高速で大規模な移動をおこなうわけでもない。それは、路上の諸物や他者との変化する無数の質の異なる関係項のなかに身をおく動きであるという特徴がある。哲学者のグツォーニは、こうした徒歩の動きを「住まいつさすらう」存在様態として特徴づけ、退屈または慌しさとは別の次元で生きる思想として掲げている。

（土井清美「徒歩者の景観——場所・動き・知」『徒歩者の景観——場所・動き・知』）

問一

「道中の景色を楽しむ気ままな旅」^アとあるが、それが何をもちたらずと筆者は考えているか。最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

15

- 1 夢想やナイーブさ
- 2 カプセル化された定着性
- 3 価値や意義を擁する行為
- 4 必然性に回収されえない経験
- 5 ただ右足と左足を交互に出す単純な動き
- 6 畜舎から牧草地まで移動する家畜の親子の姿

問二

「左右^イされる」の意味として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

16

- 1 支配される
- 2 牛耳られる
- 3 拘束される
- 4 命令される
- 5 指図される
- 6 差配される

問三

「あり^ウきたり」の意味するように」の「ように」と同じ用法として最も適当と思われるものを、次の中から一つ選べ。

17

- 1 英語が話せるようになった。
- 2 なんだかだまされているように感じる。
- 3 みなさんご存知のように、彼は一流の選手です。
- 4 りんごのように顔を真っ赤にして彼女は怒った。
- 5 後ろの席の人にも聞こえるように話してください。
- 6 東京のように大都会にはいろいろな人が集まってくる。

問四

「モチ^エーフ」の意味として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

18

- 1 主題 2 主張 3 対象 4 客体 5 素材 6 根拠

問五

「地に足をつけて」とあるが、「足」を用いた慣用表現として**適当でないもの**を次の中から一つ選べ。

19

- 1 足が出る 2 足が広い 3 足下を見る
4 二の足を踏む 5 揚げ足を取られる 6 後足で砂をかける

問六

「しばしば」と同じ品詞のことばを含むものを次の中から一つ選べ。

20

- 1 きれいに最後まで食べた。
2 さしたる根拠もない話だった。
3 ところが、雨は降らなかった。
4 おそらく彼は遅刻してくるだろう。
5 よって、融資はできないという結論に至りました。
6 いわゆる「広島風お好み焼き」はやきそばが入っている。

問七

「固定的でも流動的でもない徒歩の動き」とあるが、それを示す語句として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

21

- 1 右足と左足を交互に出す動き 2 動きと共に揺らぐ不安定なもの
3 ロマン主義的なものへの志向性 4 「移動するひとびと」による経験
5 「住まいつつさすらう」存在様態 6 文化の流動性における多層的なフロー

問八

「戯画的」とあるが、「戯画」の意味として最も適当と思われるものを、次の中から一つ選べ。

22

問九

- 1 シニカルな態度
- 2 ビビッドな展開
- 3 ウィットのある描写
- 4 クリテイカルな主張
- 5 ドラマチックな表現
- 6 ユーモアのある誇張

問九 AとBに入ることばの組み合わせとして最も適当と思われるものを、次の中から一つ選べ。23

- 1 A 移動手段 B 余暇活動 2 A 余暇活動 B 移動手段 3 A 研究対象 B 移動手段
- 4 A 移動手段 B 研究対象 5 A 研究対象 B 余暇活動 6 A 余暇活動 B 研究対象

問十

問十 CDEFに入る語句の正しい順序を示しているものを、次の中から一つ選べ。

- 1 C また D とりわけ E たとえば F つまり 2 C つまり D また E とりわけ F たとえば
- 3 C つまり D とりわけ E また F たとえば 4 C たとえば D また E とりわけ F つまり
- 5 C とりわけ D つまり E たとえば F また 6 C とりわけ D たとえば E また F つまり

問十一

問十一 GHIJに入る語句の正しい順序を示しているものを、次の中から一つ選べ。

- 1 G 身体性 H 物質 I 身体性 J 景観と身体 2 G 身体性 H 景観 I 景観 J 物質と身体
- 3 G 物質 H 身体性 I 身体 J 物質と景観 4 G 物質 H 景観 I 物質 J 景観と身体
- 5 G 景観 H 身体性 I 身体 J 物質と景観 6 G 景観 H 物質 I 景観 J 景観と身体

問十二

問十二 Kにはaとeの五つの文が入る。正しい順序を示すものを、次の中から一つ選べ。26
a この溝とは、場所について「移動しない人びと」の立場から見るか「グローバルに移動する人びと」から見か

問十三

るかというアプローチにおける相違に言い換えられうるだろう。

b 場所との関わりの堆積がその場所に固有性をもたらし、地形や風土と結びついた暮らしをする人びとに落ち着きのある感覚を与える。

c これらの根本的な相違は、土地を大きく移動しない暮らし方とグローバルに移動しながらの暮らし方の違いとしても相対化され、またそれらを研究対象とする理論的視座においても埋めがたい溝がある。

d 「移動しない人びと」からのアプローチとは、エドワード・レルフやイーファー・トウアンなど現象学的地理学において広く知られた見方である。

e たとえば定住する農耕民と移動する遊牧民は、単に生業が違うだけでなく、土地との関わり方も、物事との出合い方も違う。

- | | | | | | |
|---|-----------|---|-----------|---|-----------|
| 1 | a c d e b | 2 | b c e a d | 3 | b d a c e |
| 4 | c e a b d | 5 | d b e c a | 6 | e c a d b |

本文の内容に合致するものを、次の中から二つ選べ。

(27) の欄に、二カ所マークすること (27)

1 近年の徒歩に関する研究は「移動しない人びと」に対する「移動する人びと」の優位性を掲げてきた。

2 近年の徒歩に関する研究は、人びとの移動を越境として位置づけ、グローバルな文化の相互浸透を可視化している。

3 近年の徒歩に関する研究は、人間の運動に伴う景観の流動性に着目することで、既成の分類方法を揺るがしつつある。

4 グローバルに移動する人びとは、類似した人や事物と関わり、固定的な世界で生きている。

5 グローバルに移動する人びとは、トランスナショナルな移動を経験し、劇的に変化する世界の中を生きている。

6 グローバルに移動する人びとは、土地への定着性を持ちつつも、そのなかに激しい流動性を内包しながら生きている。

大問一		解答
問一	1	⑥
問二	2	⑥
問三	3	②
問四	4	③
問五	5	②
問六	6	⑤
	7	①
	8	⑥
	9	②
問七	10	⑤
問八	11	⑥
問九	12	⑤
問十	13	③
問十一	14	③⑥

大問二		解答
問一	15	④
問二	16	①
問三	17	③
問四	18	①
問五	19	②
問六	20	④
問七	21	⑤
問八	22	⑥
問九	23	①
問十	24	⑤
問十一	25	②
問十二	26	⑥
問十五	27	③④